

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 陸 洋

論文題目 張愛玲と戦時—イメージの差異化—

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 星野 幸代

委 員 名古屋大学教授 胡 潔

委 員 名古屋大学名誉教授 村主 幸一

委 員 早稲田大学准教授 中村 みどり

本論文は、中国近現代作家・張愛玲について、彼女が中国の民国期の多元的な文化を受容し、それが文学的・政治的背景のもとで創作へと転化されていくプロセスを追うことにより、既成イメージと彼女の創り上げたイメージとの差異を明らかにすることを目的としている。以下、本論文の概要と審査結果を報告する。

[本論文の概要]

序章では、先行研究について整理し、本研究の問題意識と目的、方法について述べている。

本論にいう差異とは、フェミニズム文学批評の認識論であるグリーン&カーン『差異のつくり方』(*Making a Difference: Feminism Literary Criticism*)で提示された、規範とされてきた男性作家テキストと、そこから逸脱する女性作家テキストとの差異を指す。文学的伝統と張愛玲との差異は先行研究も認識しているが、指摘に留まっていた。また、従来の張愛玲研究の多くは史実考証や理論の応用に重点を置いていた。それに対し本研究はテキストを精読する姿勢を取り、中国/異国、近代/前近代、経典/通俗文化など作者の文学的素養となる要素をプレテクストとして張愛玲の作品を読み解く。この方法により本論文は、張愛玲が民国期上海で受容したそれらの要素が如何に彼女の心象風景を構成し、既成作家(男性・西欧)の構成するステレオタイプな表現・イメージとは異なる固有のイメージを創り上げたかを追求していくことを目的としている。

第二章では、張愛玲が日本占領下 1940 年代上海で日本に言及した散文「童言無忌引」、「忘不了の画」、「談画」「談跳舞」を取り上げ、戦時期の異文化受容と創作への転化のプロセスを追い、日本文化の受容は彼女の中国人アイデンティティにどのような脅威をもたらしたかを考察した。張愛玲の散文は常に同時代の政治的イデオロギーを脱政治化する傾向をもっていると言われてきた。だが、戦時期、国民性の尊厳の危機的状況下では、文化的な多元性を許容するコスモポリタンの姿勢だけでなく、日本文化に対抗する中国人アイデンティティの前景化が読み取れる。

第三章では、京劇『霸王別姫』をプレテクストとする張愛玲の早期小説「霸王別姫」と円熟期の傑作「傾城之恋」を考察している。京劇『霸王別姫』は 1920-1940 年代の人気上演作であり、張愛玲はそれを鑑賞し、国に対する女性のジェンダー役割という近代的意味を受容した。張愛玲「霸王別姫」と「傾城之恋」は、執筆時の文脈に照らしてプレテクストのイメージの意味を変え、パロディ化している。「傾城之恋」のヒロイン白流蘇による中国人女性アイデンティティの「演技」は、彼女を取り巻く状況の変化に応じて考察することにより、家父長的言説やナショナリズム的言説が築かれている構造とその脆さを示唆していることが分かる。張愛玲は、国家の歴史と市民的日常とを架橋する手段として京劇の要素を受容したといえる。

第四章は、張愛玲小説の中でも低く評価されてきた「連環套」を取り上げ、オペラ『蝶々夫人』をめぐる一連の作品、ピエール・ロチの『お菊さん』というオリエンタリズム小説と比較しつつ、コロニアルな状況を反映する作品として再読している。「連環套」の人物設定は『蝶々夫人』型であるが、ヒロイン霓喜の容姿、性格は東洋人女性のステレオタイプから逸脱しており、プロットの展開にはロマンやセンチメンタルな要素がいっさい切り捨てられている。従って、霓喜は東洋人女性のステレオタイプの戯画として読めるが、さらに香港のコロニアルな現実を生き抜く主体的な女性像として造型されている。「連環套」はこのようにヒロインを主張する「他者」を描いた、オリエン

タリズムに抵抗するテキストとして捉えることができる。

第五章は、戦後、映画『不了情』のシナリオを手掛けた張愛玲がそれを自らノベライズした「多少恨」と、彼女が戦時期上海で鑑賞した日本映画『歌ふ狸御殿』と『阿波の踊り子』との関係性を考察している。張愛玲はこの二作のミュージカル映画の童話的な表現形式と身体表現を散文「談跳舞」において賞賛している。それらの要素は「多少恨」におけるシンデレラ・ストーリーの採用、場面設定、靴を代表とする小道具のイメージにおいて読み取ることが出来る。いっぽうでストーリーの結末、女主人公の性格、人物の役割においては独自性がみられ、そこには善悪に単純化された人物造形に対する異議と、社会批判の意識がうかがわれる。

第六章では、戦時の体験に取材した散文「燼餘録」と、渡米後の 60 年代に英文で書かれた自伝的小説 *The Book of Change* における戦争経験の書き方を比較している。この二作品は、いずれも張愛玲が 1941-1942 年に大学生として香港で経験した空襲、飢饉や陥落後の動乱に取材している。同じく戦時中の生死、恋愛とセクシュアリティ、文明の存続などの問題を扱っているが、「燼餘録」の語り手・張愛玲は基本的に観察者であるのに対し、*The Book of Change* では作者の分身・琵琶が主観的に語り、生死観、恋愛観または中国伝統文化に関する認識の変化を描いている。二つのテキストには呼応性、インターテクスチュアリティが存在する

第七章は、京劇『紅鬃烈馬』と、張愛玲の小説「等（待つ）」、『小団円』との比較を通じて、それらに共通する時空間の表象の仕方と、女性人物の態度の相違について考察している。京劇『紅鬃烈馬』は、戦地に赴いた夫を辛抱強く待つ妻と大団円という伝統的な「王宝釧物語」の系譜に連なる。張愛玲は「王宝釧物語」の基本プロットを踏まえつつ、「等」では他に選択肢がないために「待つ」女性の心理を描き、『小団円』では夫を待たず探しに行く行動力のある女性にヒロインを描きなおしており、『紅鬃烈馬』のジェンダー・イデオロギーに対する張愛玲の疑義がうかがわれる。時間と空間の表象が、人物の関係性を隠喩的に構築する機能を果たしているという点では、『紅鬃烈馬』に一部倣っている。

第八章は、「漢奸」である男と彼に近づく女を中心に展開する小説「色，戒」と『小団円』を対象に、性と暴力が絡み合う男女関係を戦争のメタファーとして分析している。プレテキストは、実際に起きた漢奸暗殺未遂事件に関する言説であり、それを張愛玲が如何に受容したかを踏まえて、小説において戦争の力学がどのようにジェンダーの政治学と関係しているのかに焦点を当てた。二作において戦局の変転は出会い、駆け引き、すれ違いと別離など、物理的・心理的な男女関係に異変をもたらす。男女が互いに振るう暴力、女性側への性的制圧、女主人公が自他に向ける破壊衝動などのタナトス的な要素は、戦況のメタファーとなっている。なお、日中戦争期を舞台としながら、それに反映されているのは、小説の書かれた 1950 年代冷戦期の社会不安と時代的心理である。

総じて、張愛玲は伝統的なイメージを継承しつつ、同時代の社会的、個人的状況に照らして修正し提示している。張愛玲によるイメージの差異化は、社会通念とそれを支える固定観念や社会因習を対象とする場合と、同じ題材を扱った自らの作品の表現、認識を対象とする場合とがある。後者は張愛玲の自己差異化とも言える。1940 年代の作品では戦争の隠喩は日常生活や家庭内の文脈に織り込まれていた。1950 年代以降になると、同じく 40 年代の戦争を題材としつつも、戦時期の社会

批判や人物の複雑な心理を前景化させ、主題においても、文化の伝承と修正、他者との連続性、共同体のアイデンティティを超える共感へと作者の関心が深まっていく。これらの張愛玲の創作に起きた差異化は、時代とともに移り変わる彼女の認識の変遷を反映していると考えられる。

〔論文の評価〕

張愛玲研究は論文数が非常に多い割には、その数奇な生涯のためか伝記的研究に関心が集中し、作品研究の方でも幼少時のトラウマや、小説家としての絶頂期における胡蘭成との婚姻に即して解釈するものに偏っている。それに対し本研究はテキストに正面から向き合い、男性作家ないし西洋の文学的伝統と比べ張愛玲がどのような差異を創り出したのかという、フェミニズム／ジェンダー文芸批評的な問題を提起する。そのうえで戦時を描く作品群というオリジナルな範疇を設定し、張愛玲が受容した多様な要素から彼女の創り出した「イメージ」の“束”を、プレテキストと作品の精確な読解によって検討することにより、各章において非常に独創的な解釈を提示し得ている。先行研究について中国語、日本語、英語圏のものを幅広く踏まえている点も評価できる。今世紀に初めて公開された張愛玲作品をも多く取り上げ、それらの魅力と意義を新たな視点から浮かび上がらせた力作であるといえる。

いっぽうで本論は、張愛玲が創り出す「イメージ」を醸成する次元として、インターテクスチュアリティ、アダプテーション、アリュージョン、翻案、また張愛玲自身の作品など多くのものを含めているのだが、それぞれの性質に応じて適切に扱っているかには疑問が残る。また、それらの効果に気を取られ、小説のテーマを読み誤る危険性もある。例えば、表象メディアがテキストのイメージにもたらす影響を考察する際、イメージとは本来視覚的なものであるために、複数のモチーフを駆使して作者が構成している小説を視覚的なモチーフに偏重して解釈していないか等、留意すべきであろう。

筆者自身も終章で述べている通り、張愛玲の戦時期の作品は時代背景が非常に重要である、本論は中国の社会文化的な概況はおさえているが、よりきめ細かく歴史的な文脈と絡み合わせることでより深く解釈をもっと深められたであろう。例えば、作品の執筆・発表年に日中戦争はいかなる段階にあったか、小説が掲載された文芸誌の政治的背景・文壇的動向の中で作品はどのような意味をもったか等考察を加えることにより、作品の潜在的な意義がより明らかになるであろう。張愛玲の中国人アイデンティティについても、1941-45年から1950年代の渡米後にかけて上海人アイデンティティから香港人アイデンティティへと接近する過程が見出せるのではないか。さらに、日本／日本人観については、戦時連合軍側のプロパガンダの影響も合わせて考察することが効果的であろう。

作品分析の作法としては、あらずじ説明に基づいて小説を分析する例が多かったが、適宜小説のテキストの引用を入れ、それに基づく方が望ましい。各章を有機的につなげる余地も多く、例えば第三章と第八章は親和性が高い。なお、筆者の文学的センスは資質として光るものがあり、それが日本語でも格調の高い文章を書こうという意欲に表れており、それ自体は高く評価できるのだが、しばしば難解に過ぎる。論文では意図の伝達をある程度優先させ、簡潔な表現を心掛けてほしい。

しかしこれらの課題は本論文の全体的な評価を損ねるものではない。本論文は、上述の通り、独創的な問題提起と精緻な分析により張愛玲作品の新たな局面と意義とを提示し得ており、近現代中国文学研究において優れた貢献を果たしたといえる。

従って、論文審査委員は全員一致で、本論が博士學位論文として水準に達していると判断した。